豪華客船の新型コロナウイルス集団感染　医療従事者たちの苦悩と葛藤を描く　映画「フロントライン」　事実に基づく物語　横浜みなとみらいで医師の試写会

6/11　リライフネット

横浜港で 2020 年 2 月に起きた豪華客船「ダイヤモンド・プリンセス」での新型コロナウイルス集団感染。世界各国の乗員乗客 3711 人を救うため、未知のウイルスと対峙して治療などの救援にあたった医師や看護師の葛藤を描いた映画「フロントライン」が 6 月 13 日に公開される。

「事実に基づく物語」で、まさに現場となった横浜みなとみらいで 5 月 29 日、神奈川県医師会（菊岡正和会長）主催の試写会が開かれた。参加した医師の声を交えたレポートを報告する。（石黒正彦）今回の試写会には、当時、対策本部やクルーズ船内で実際に対応にあたった医療従事者や、黒岩祐治・神奈川県知事ら約 100 人が参加した。

当時の思い出を語る黒岩祐治知事（左）、阿南英明医師（中）、堀岡伸彦さん（右）

豪華客船を襲ったパンデミック　何が起こっていたのか

巨大な客船にボランティアの医療チーム「DMAT」（災害派遣医療チーム）が乗り込み、治療や船外と通信する緊迫した場面が映像で繰り返される。ドキュメンタリータッチで淡々と描かれるだけに、観る側にとってはコロナ禍の記憶がオーバーラップしてくる。

「5 年前から医療関係者がつらい思いをして乗り越えてきたが、そのスタートがこの船の話だった」と試写会の際に振り返ったのは、俳優・小栗旬が演じる主人公・結城英晴医師役のモデルとなった現・神奈川県立病院機構理事長の阿南英明医師。

当時は対策本部で陣頭指揮を執り、今回は映画制作の総監修を務めた。「本当にどんなことがあったかは報道も含めて知られていない部分が多々ある。そこを深掘りし、エンターテインメントの側面をもちながら事実をお伝えする映画になっている」と語る。

阿南医師が当時所持していた聴診器を実際に貸し出し、小栗演じる医師が症状に苦しむ乗組員の女性を診察する場面も撮影された。当時はどうしても乗客に視点がいきがちだったが、阿南医師は、客船で業務にあたる乗組員たちが取り残されていることに非常に心が揺さぶられたのを覚えている。

「あのシーンでは本物の聴診器を使ってもらった。撮影現場で小栗さんの後ろ姿を見て

いるだけで涙が出た」。

世間の偏見や差別　闘ったのはウイルスだけではなかった

日本国内へのコロナ感染への懸念の中で、未曽有の豪華客船での集団感染を「災害」と認定して対応に動いた黒岩知事。「5年前を思い出し、胸が苦しくなる思いだ。DMATに出動をお願いしたが、皆さんに大変な思いをさせたんだなと改めて知り、この決断は重かったと感じた」と感想を述べた。また「闘ったのはウイルスだけでなく、世間の偏見もあった。そういった困難を乗り越えてきた原点を思い出させてくれる映画だ」と語った。

厚生労働省から県庁に派遣されて患者の受け入れ先病院の手配に奔走した俳優・松坂桃李が演じる立松信貴役のモデルで、現・文部科学省医学教育課企画官の堀岡伸彦さんもこの日の試写会に顔を見せた。

「このフロントラインの経験が日本全体で多くの命を救った。逃げなかった人たちが多くいた、ということを知っていただきたい」と語ると、ともに難局にあたった阿南医師も、「偏見や差別、恐怖から遠ざけようとする人がいたがこういうことがないように、次の世代にもっと賢く乗り越える方法というメッセージをなんとか残していけたら」と大きくうなずいていた。（取材協力・朝日カルチャーセンター）